HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日本語の「内の関係」を持つ名詞修飾節について
Author(s)	山下, 好孝
Citation	国際広報メディア・観光ジャーナル, 36, 99-113
Issue Date	2023-07-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90190
Type	departmental bulletin paper
File Information	Jimcts_36 (6).pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

Jimcts

日本語の「内の関係」を持つ名詞修飾節について

モンクット王ラカバン工科大学教授、北海道大学名誉教授
山下　好孝

On Japanese Noun-Modifying Clauses Based on "Internal" Relations

YAMASHITA Yoshitaka

abstract

The present study examines Japanese noun-modifying clauses based on "internal" relations. This term means that the head noun has a syntactic relation with the predicate of the modifying clause indicated through case-marking particles in the original sentence. There are nine case-marking particles in Japanese: *ga, wo, ni, e, de, to, kara, made* and *yori*.

This study claims that internal relation type noun-modifying clauses cannot be produced when the particles used are *made* and *yori*. There are also cases with the particle *kara* in which the original sentence cannot be converted into a noun modifying clause.

1) *Gakusei-ga Kyoto-kara kita.* → #*gakusei-ga kita Kyoto*
"A student came from Kyoto"

The conversion of an original sentence into a noun-modifying clause is likewise not possible when case-marking particles like *de* and *to* express a reference point:

2) *Kare-ga class-de ichiban se-ga-takai.* → **kare-ga ichiban-se-ga-takai class*
"He is the tallest in the class"
3) *Kare-ga chichi-to niteiru.* → **kare-ga niteiru chichi*
"He resembles his father"

Finally I suggest that cognitive schemas also play an important role in Japanese noun-modifying clauses based on "internal" relations.

1 初めに

日本語の名詞修飾節（連体修飾節）はヨーロッパの言語にはない多様な関係を被修飾名詞句と結んでいる。修飾節の述語と被修飾名詞との間に格助詞を介した統語的関係が認められるものは、従来「内の関係」を持つとされている。そして修飾節の述語と被修飾名詞に統語的関係が認められないものは「外の関係」にあるとされる。

1）サンマを焼く男　（内の関係）
2）サンマを焼く匂い（外の関係）

また「外の関係」にある名詞修飾節もいくつかのタイプに下位分類されている。

本研究ノートは先行研究の分類が厳密な基準に基づいているかどうかをまず検証する。日本語の格助詞を介した関係にあるものを「内の関係」と厳密に定義づける。そして、その基準の外にあるものを「外の関係」にあると主張する。

それに基づき、日本語の9種類の格助詞のそれぞれについて、それが結びつく名詞句が名詞修飾節の被修飾節になるのかならないのかを詳細に検討する。

2 「内の関係」か「外の関係」か

先行研究の一つである神澤（2012）には、次のような説明がある。

3）内の関係
主要部は修飾部に対して格助詞で表される関係を内在しており、修飾部は主要部の特定を行っている。
e.g.　［投手が投げた］ボールを捕った。［ヲ格］
　　［モグラが出てきた］穴を見つけた。［カラ格］

4）外の関係
主要部にどのような格助詞をつけても修飾部のどこにも納めることができず、修飾部は主要部名詞句の内容を補完している。
e.g.　この頃［トイレに行けない］コマーシャルが多くて困る。
　　［高校入試に絶対受かる］家庭教師を探しています。

神澤（2012：46）

山下 好孝 YAMASHITA Yoshitaka

神澤（2012）が挙げた「カラ格」を介した内の関係について、もう少し掘り下げて考察してみる。上記の名詞修飾節は次の文を元にして作られた文であると考えられる。

5）モグラは（その）穴から出てきた。→　モグラが出てきた穴

しかし同様の格助詞「カラ」を用いた次の文ではどうだろうか。

6）学生が京都から来た。→　＃学生が来た京都
（「＃」の記号はその文が非文法的ではないものの、意図した意味を表していないことを示す。）

この6)の名詞修飾節は次のような文から出来ていると解釈されるのである。

7）学生が京都に/へ来た。→　学生が来た京都

さらに「内の関係」を表す修飾部が被修飾名詞を特定しているのではなく、情報を補完している場合もある。

8）英語を話せない私は通訳を雇わざるをえなかった。

英語の場合は、被修飾名詞が特定される「限定用法」の関係代名詞節と、被修飾名詞句の情報が補完される「非限定用法」の関係代名詞節の二つが認められる。前者は「被修飾名詞を特定」し、後者は「被修飾名詞の情報内容を補充」している。しかし日本語ではどちらの用法で使われているかは、ポーズの有無ではなく文脈に依存している。そして、「外の関係」にある名詞修飾節でも被修飾名詞を「特定」している場合がある。

9）辞書を買ったお釣りと万年筆を買ったお釣り

また神澤（2012）は「外の関係」をどのような格助詞をつけても修飾部のどこにも納めることができないものと規定しているがはたしてそうであろうか。同研究が挙げている例文で検証してみる。

10）最近のコマーシャルはとてもおもしろい。そのようなコマーシャルで
トイレにも行けないことがある。→　トイレに行けないコマーシャル

11）私たちの派遣する家庭教師で、高校入試に絶対受かることができます。
→　高校入試に絶対受かる家庭教師

すなわち元の文が手段、道具、原因などを表す「デ格」を用いていると考えれば、これらの名詞修飾節は「内の関係」を表すことになる。

別の先行研究である片桐・田路（2018）を見てみる。そこでは次のような例文が挙げられている。そして、これらを名詞修飾節noun-modifying constructions（NMC）と名付けている。

12）太郎が昨日買った本
13）本を買った学生
14）本を買った知らせ（同格節）
15）本を買ったお釣り
16）頭が良くなる本
17）翻訳したお金
18）食べたお茶碗
19）トイレに行けないサスペンスドラマ
20）太らないお菓子
21）美人になる温泉
22）就職が難しい物理学

これらのうち英語の関係節relative clause（RC）に相当するのは12）13）14）で、以下の英文が該当する。

12'）a book which/that/ϕ Taro bought yesterday
13'）the student who bought a book
14'）the news that (X) bought a book

これ以外の名詞修飾節は「外の関係」にあるとしているが、それに関して厳密な定義は示していない。結局、英語に翻訳出来るものと出来ないものを区別しているだけで、日本語の名詞修飾節の考察にはなっていないのである。そこで、格助詞を用いて独立文に還元できるかという基準で考えてみよう。そうすると16）18）などは以下の文から派生したと考えられる。

16'）その本で頭が良くなる。　　→　頭が良くなる本
18'）そのお茶碗でご飯を食べた。→　食べたお茶碗

このように考えるとこれらの名詞修飾節は「内の関係」にあることになる。

日本語を分析するにあたって、英語と「対照」して考察することは意義がある。しかし、英語を「基準」にして考察することには賛同できない。あくまでも参照する程度にとどめるべきであろう。

同様に英語を参照しながら日本語の名詞修飾節を考察した先行研究にYabuki-Soh（2013）がある。原文は英語なので日本語表記に変えて例文を提示する。

Yabuki-Soh（2013）における「内の関係（関係代名詞節）
23）（主格）学生が本を読んだ。　　→　本を読んだ学生

24）（対格）昨日本を読んだ。　　→　昨日読んだ本
25）（与格）学生に本をあげた。　　→　本をあげた学生
26）（斜格）昨日ホテルに泊まった。　→　昨日泊まったホテル
27）（属格）先生の奥さんが亡くなった。→　奥さんが亡くなった先生
　Yabuki-Soh（2013）における「外の関係」
28）飛行機が落ちたニュース
　Yabuki-Soh（2013）における「その他の関係（省略した構造）」
29）その味噌汁を飲めば野菜を食べる。　→　野菜を食べる味噌汁

結局Yabuki-Soh（2013）における「内の関係」は英語の関係代名詞（which、who、that）、または関係副詞（where、when）で表現出来る日本語名詞修飾節を集めたに過ぎない。そして、「外の関係」は英語のthatで導かれる同格節に対応する。例文29）は日本語として奇妙な文であるが、前述の二つのカテゴリーに含まれないものとして、ここに分類している。繰り返しになるが、英語と対照することはそれなりに意味はあるだろうが、日本語の名詞修飾節の本質を示したことにはならないのである。

詳細に検討するとさらに疑問が出て来る。例えば27）の例文はどうであろうか。Yabuki-Soh（2013）は「属格」の「ノ」が後接する「先生」が被修飾名詞となっている。では同様の構造を持つ次の文は上と同じ名詞修飾節化が可能であろうか。

30）フランス語の雑誌が紛失した。→　??雑誌が紛失したフランス語
(?の記号はこの文が不自然であることを示す。??はかなり不自然であることを意味する。さらに＊の記号は当該の文が文法的に不適格であることを示す)

「ノ」は単文においては格助詞とは見なされない。すると27）の文は次のような文を基底に持つと考えるべきであろう。

27'）先生は奥さんが亡くなった。→　先生が奥さんが亡くなった（こと）
　　→　奥さんが亡くなった先生

同様の例を挙げる。

31）太郎は英語が得意だ。→　太郎が英語が得意なこと
　　→　英語が得意な太郎
　　→　太郎が得意な英語

結論として、助詞「ノ」でマークされる名詞句を名詞修飾節の被名詞句とすることは適切ではない。

次の節では日本語の格助詞に基づく名詞修飾を「内の関係」と規定する。そして、それぞれの格助詞が後節する名詞句が名詞修飾節の被修飾名詞句になるかどうかを検証する。

3 述語との格関係(統語的関係)に基づく名詞修飾節：内の関係

日本語には9種類の格助詞が認められる。

32)「ガ」「ヲ」「ニ」「ヘ」「ト」「デ」「カラ」「ヨリ」「マデ」

これらの助詞がついた名詞がすべて名詞修飾節の被修飾名詞になるわけではない。では格助詞のそれぞれについて考察を進める。

3-1.「ガ格」

基本的に行為者となるガ格名詞句は、名詞修飾節の被修飾名詞になる。

33) 馬が走った。→　走った馬

問題となるのは「対象」を示すガ格名詞や「〜ハ〜ガ」構造におけるガ格名詞である。

34) 太郎は（が）英語が出来る。
→　英語が出来る太郎（は米国に行った。）
→　太郎が出来る英語（はたいしたことはない。）
35) 太郎は（が）問題に気が付いた。
→　問題に気が付いた太郎
＊太郎が問題に付いた気
36) 象は（が）鼻が長い。→　鼻が長い象
→＊象が長い鼻
37) 庭の桜は（が）花が咲いた。→　花が咲いた庭の桜
＊庭の桜が咲いた花

これらの文の中で名詞修飾句になりにくいのは、組み合わせが固定された慣用句（気が付く）であったり、共起関係が限られる語句（花が咲く）であったりする。それに対し、34）の「〜が出来る」という語句では様々な名詞句が生起できる。

38) 英語、料理、スポーツ、お花　等　＋　が　＋　出来る

このような意味の制約が名詞修飾構造の制限になっているのかも知れない。この問題については本研究ノートではこれ以上の考察は進めない。将来、改めて考察の機会を持ちたいと思う。

山下 好孝 YAMASHITA Yoshitaka

3-2.「ヲ格」

「ヲ格」名詞句は動作の対象（目的語）を表す。この場合のヲ格名詞句は名詞修飾節の被修飾名詞になる。

39）太郎はご飯を食べた。→　太郎が食べたご飯

しかし、ガ格名詞句の場合と同じように、慣用句になると必ずしも名詞修飾節には変換できない。

40）彼は臍（ほぞ）をかんだ。→　＊彼がかんだ臍

「臍（ほぞ）」というのはヘソのことで、かむことができないものだ。そこから「すでに及ばないことを悔やむ、後悔する」という意味が生まれた。したがって論理的にも「かんだ臍」という表現が成り立たないことにもなる。

3-3.「ニ格」

日本語の「ニ格」名詞句には様々な意味がある。

41）（方向）彼が学校に来た。　→　彼が来た学校
42）（存在の場所）丘の上に学校がある。→　学校がある丘の上
43）（感情の原因）彼女はその知らせに驚いた。→　彼女が驚いたその知らせ
44）（時間）私は6時に食事した。　→　私が食事した6時（はまだ明るかった。）

では時間を表す名詞句が無助詞で使われた場合はどうであろうか。

45）（時間）彼は先月φ ここに着いた。→　彼がここに着いた先月
（はまだ寒かった。）

通常、「先月、昨日、今日、明日」など相対的な時間を表す名詞句には助詞「ニ」は付かないとされる。しかしそれらの名詞句に「取り立て助詞」の「ハ」が付加されると「ニ」が共起する。

46）（時間）彼は先月にはここに着いたはずだ。

したがってこれらの時を表す名詞句には助詞「ニ」が付加されていると想定出来る。そのため、これらの名詞句が被修飾名詞になる名詞修飾節も「内の関係」にあると見なすことが出来るのである。

次に人の名詞句と結びつく「ニ」の用法を見ておこう。

47）（着点）私は彼に指輪をあげた。→　私が指輪をあげた彼
48）（起点）私が彼に指輪を貰った。→　??私が指輪をもらった彼

49）（着点）彼に指輪をあげた。　→　指輪をあげた彼
50）（起点）彼に指輪を貰った。　→＃指輪を貰った彼
cf.　彼が指輪を貰った。　→　指輪を貰った彼

助詞「ニ」が人に関与する場合、「起点」ではなく「着点」を表す場合に、内の関係の名詞修飾節を形成するといえよう。そのことを「使役」と「受身」の構文に関しても見ておく。

51）（着点：被使役者）社長が彼に大阪へ行かせた。
→　社長が大阪へ行かせた彼
52）（起点：行為者）　彼が社長に大阪へ行かされた。
→＊彼が大阪へ行かされた社長

さらに、2種類の異なる「ニ格」名詞が使われている文を検討する。最初の「ニ」は「起点」であり、後の「ニ」は「着点」を表している。この場合でも着点を表すニ格名詞句の方が被修飾名詞句になりやすい。

53）（起点）（着点）
私は 彼に［社長に 紹介して］もらった。→私が彼に紹介してもらった社長
＃私が社長に紹介してもらった彼

ニ格名詞の場合、「着点」の読みの場合にのみ、名詞修飾節の被修飾名詞句になると結論づけられよう。

次に慣用句的な構文におけるニ格名詞についても言及する。

54）体力の限界を引退の理由にした。　→　引退の理由にした体力の限界
→＊体力の限界をした引退の理由
55）太郎をキャプテンにした。　→　キャプテンにした太郎
→＊太郎をしたキャプテン

「AをBにする」という構文は「AをBの原因、要因とする」という意味や「AをBという身分にする」というような意味を持つ。このような慣用句的な構文では、ニ格名詞を名詞修飾節の非修飾名詞にすることは出来ない。

さらに次のような構文でも同じことが観察される。

56）ピッチャーを［宮西から北山に］交代した。
→　［宮西から北山に］交代したピッチャー（がうまく機能した。）
→＊ピッチャーを宮西から交代した北山
→＊ピッチャーを北山に交代した宮西

この例文では「～カラ～ニ」という部分が一種のセットになって述語動詞「交代した」と統語関係を結んでいる。「起点、着点」がセットになっている場合

にはたとえ「着点」を表すニ格名詞句でも、名詞修飾節の被修飾名詞句にすることは出来ない。

最後に「目的を表すニ格」について触れる。

57）おじいさんは山へ柴狩りに行った。→＊おじいさんが山へ行った柴狩り
58）彼は日本へ留学に来た。　　→＊彼が日本へ来た留学

このニ格名詞は「柴狩りする」という動詞から派生している。このような名詞句は動詞と考えることが出来る。

57'）おじいさんは山へ柴狩りしに行った。
58'）彼は日本へ留学しに来た。

これらは動詞と見做すことが出来る。従って名詞修飾節の被修飾名詞にはならない。

このようにニ格名詞句が名詞修飾節の被修飾名詞になるためには、様々な制約が存在する。また表面的には格助詞に見えても、主節の述部と直接の統語的関係を結ばない助詞があることに注意しなければならない。

59）決意を胸に、男は試合会場に向かった。

この文の最初のニ格名詞は格助詞ではなく、付帯状況を表す従属節の一部になっている。述語動詞と統語的関係が認められないからである。

次の節ではニ格とよく似た「へ格」名詞を扱う。

3-4.「へ格」

「へ格」名詞句は一般に「行き先、着点」を表すとされる。

60）彼は大阪へ行った。→　彼が行った大阪
61）彼は大阪へ来た。　→　彼が来た大阪
62）私はデパートへ買い物に行った。→　私が買い物に行ったデパート

これらの「行き先、着点」を表す名詞句は名詞修飾節の被修飾名詞になる。しかし、次のような文ではどうだろうか。

63）コンクリートから人へ政策を修正していく。
　　→＊コンクリートから政策を修正した人
64）開催へ努力を惜しまない。　→??努力を惜しまない開催

1つの文の中で「起点、着点」が両方表されている場合、通常、「着点」を表す名詞句のみが名詞修飾節の被修飾名詞になる。

65）江戸から京都に/へ 歩いて行った。　→　江戸から歩いて行った京都
　　→＊京都に/へ 歩いて行った江戸
66）東京から北海道へ新幹線が延びた。
　→　東京から新幹線が延びた北海道（は、行きやすくなった。）
　→　＊北海道へ新幹線が延びた東京

従って63）の「～から～へ」という語句のへ格名詞は上の例文のような「行き先」を表している助詞ではない。実は、これらのへ格名詞句は実は述語動詞の項にはなっていないのである。

63'）??コンクリートから人へ変更する政策
64'）＊開催へ惜しむ努力

このようなへ格名詞は、次の例文のように一種のスローガンとして用いられている。

67）札幌冬季オリンピック、開催へ！

この文は「開催に流れは向かっている、開催するよう努力する」という独立文に近い。したがって、「開催へ努力を惜しまない」の「へ」は述語動詞「惜しむ」と結びつく格助詞ではなく、目的（ゴール）を表す従属節のような働きをしていると考えられる。そのため、内の関係の名詞修飾節は成立しないのである。

　このように表面的には格助詞に見えても、主節の述部と直接の統語的関係を結ばない助詞があることに注意しなければならない。

3-5.「ト格」

　助詞「ト」が表す意味で最も多く見られるのが、相互動作の相手である。

68）（相互動作の相手）　水谷は張本と闘った。→水谷が闘った張本
69）（相互動作の相手）　山田は恵子と結婚した。→山田が結婚した恵子

それが「共同動作」を表す場合は名詞修飾句の被修飾名詞にはなりにくい。

70）（共同動作の相手）水谷は張本と中国ペアと闘った。
　→＊水谷が中国ペアと闘った張本

この場合は、副詞「いっしょに」を入れる必要がある。

71）水谷は張本といっしょに中国ペアと闘った。
　→　水谷がいっしょに中国ペアと闘った張本

次に扱う「ト格」名詞句は「基準」を表すものである。

72）今のプーチンは昔と違う。→　＊今のプーチンが違う昔
73）彼のやり方は私と同じだ。→　＊彼のやり方が同じ私

前の節で「起点、着点」が1つの文に含まれるとき、「起点」を表す名詞句は名詞修飾の被修飾名詞句にはならないことを見た。また、名詞修飾節が「起点」を表すのか、「着点」を表すのかはっきりしない場合は、通常「着点」の読みが優先されることも見た。

74）彼が来た京都　←　彼が京都に/へ来た。
＊彼が京都から来た。

「基準」を表すト格名詞も一種の「起点」を表していると考えれば、同様のメカニズムで名詞修飾節の被修飾名詞にならないことが理解出来よう。

次にト格名詞が「認識、決定の対象」になる用法を見てみる。

75）名前のない答案は0点とする。　→＊名前のない答案がする0点
76）三回の遅刻を一回の欠席と見做す。→＊三回の遅刻を見做す一回の欠席

これらの例文における助詞「ト」は名詞句に後節しているのではなく、従属節である文に後接していると考えることが出来る。

75'）名前のない答案は0点だとする。
76'）三回の遅刻を一回の欠席であると見做す。

これは格助詞ではなく補文標識としての「ト」と機能が共通する。

77）［彼は来た］と思う。

また75）76）が自動詞化、もしくは受身化した文においても、ト格名詞句は名詞修飾節の被修飾名詞にならない。

78）名前のない答案は0点となる。　→＊名前のない答案がなる0点
79）三回の遅刻が一回の欠席と見做される。
→＊三回の遅刻が見做される一回の欠席

この現象は「変化の結果」を表す構文でも観察出来る。

80）雨が雪となる。　→　＊雨がなる雪
81）努力が水の泡と化す。→　＊努力が化す水の泡

同じ変化の結果を表す構文でもニ格名詞を用いた場合は、結果が異なる。

82）彼は学級委員になった。→彼がなった学級委員（は、つまらない仕事だった。）
83）雨から雪に変わった。　→雨から変わった雪（は、湿気を帯びていた。）

助詞「ト」は名詞に付くだけではなく、補文標識として従属文にも後接する。上で挙げた例では補文標識の色合いが強いため、名詞修飾節の被修飾名詞にはならないのである。

次に、用法が多岐にわたる「デ格」名詞句について考察を進める。

3-6.「デ格」

「デ格」名詞句はいろいろな機能を果たす。その多くの場合に、名詞修飾節の被修飾名詞になる。

84）（行為者）　私どもでこの作業を行いました。→　この作業を行った私ども
85）（動作、出来事の場所）大阪で地震があった。→　地震があった大阪
86）（手段、道具）　電車で学校に通う。　→　学校に通う電車
87）（材料）　北海道牛乳でチーズを作る。→　チーズを作る北海道牛乳
88）（原因、理由）　事故で休校になった。→　休校になった事故
89）（限度）　試験を五分で終えた。→　試験を終えた五分（は短すぎる）

ところが「領域、範囲」を示す場合には被修飾名詞にしにくい。

90）クラスでジョンが一番背が高い。→　??ジョンが一番背が高いクラス
91）中国は世界で一番人口が多い。　→　＊中国が一番人口が多い世界

今までの種々の格助詞の考察の中で、それらが「起点、基準」を表す場合、それらの格助詞が後接する名詞句は名詞修飾節の被修飾名詞句にはなりにくいことが観察された。「領域、範囲」も一種の「基準」を表していると考えれば、90）91）のようなケースも同様に考えることが出来るのではないだろうか。

3-7.「カラ格」

助詞「カラ」は起点、出発点、原料を表す。

92）データーが流出したサーバーコンピューター
　←　サーバーコンピューターからデーターが流出した。
93）煙が出ている煙突
　←　煙突から煙が出ている。
94）学校まで1時間かかる学生アパート
　←　学生アパートから学校まで一時間かかる。
95）パンを作る北海道産小麦
　←　北海道産小麦からパンを作る。

ところが次の文はどうだろうか。

96）原油が流出した湾内
　←　原油が湾内に流出した。
　←＊原油が湾内から流出した。

ここでは、言語の背後にある「スキーマ」が関与する。スキーマとは過去の経験や外部の環境に関する知識の集合である。92）～95）の文では被修飾名詞が出所や材料にしかならないことが知識として話者の脳裏にインプットされている。そのスキーマの力を借りて、「カラ格」の読みが優先されるのである。

ところが 96)では出所の読みと、行き先の読みが可能である。すでに上の節で見たように、「起点、着点」の両方の読みが可能であるとき、「着点」の読みの方が優先されることを見た。このメカニズムがここでも機能していると考えられる。

「カラ格」名詞が名詞修飾節の被修飾名詞句になるとき、他の助詞の読みが優先される例が他にもある。

97）（出発時点・起点）ミーティングは午後1時から始まります。
　→　＃ミーティングが始まる午後1時（「～に」の読み）
98）（受け取り動作の相手・出所）　小林さんから時計を借りた。
　→　＃時計を借りた小林さん（「～が」の読み）
99）（物事の原因・発端）ちょっとした油断からよく失敗する。
　→　＃よく失敗するちょっとした油断（「～で」の読み）
100）（判断の根拠）調査の結果から次のようなことが見て取れる。
　→　＃次のようなことが見て取れる調査結果（「～で」の読み）
101）（出発地）彼が京都から来た。　→　＃彼が来た京都（「～に」の読み）

このようにスキーマによって「起点、出発点、原料」の読みが想定される時にのみ、「カラ格」名詞は名詞修飾節の被修飾名詞句になることが出来るのである。

3-8.「マデ格」「ヨリ格」

先行研究の一つである阿辺川、奥村（2005）では次のように述べられている。

102）本研究では格助詞として「が を に で へ と から」の7種類を対象にしているが、格要素から被修飾名詞への転出が起こらない格助詞「より」「まで」は除いている。

阿辺川、奥村（2005：113）

つまり、同じ格助詞であっても「マデ格」と「ヨリ格」の名詞句は他のも

のとは異なり、名詞修飾節の被修飾名詞句にはなりにくいということである。その場合、他の格助詞の読みが優先されるのである。

103）（起点）東口より横綱が登場した。
　　→　＃横綱が登場した東口（「から」の読み）
104）（終点）この列車は大阪まで行く。
　　→　＃この列車が行く大阪（「に／へ」の読み）
105）（起点）月より使者が到着した。
　　→　＃使者が到着した月（「に」の読み）
106）（原料、材料）チーズは牛乳より作られる。
　　→　＃チーズが作られる牛乳（「で」「から」の読み）

なお「ヨリ格」には比較の基準を表す用法がある。

107）大阪（の方）が京都より　大きい。→　京都より大きい　大阪
　　＊大阪の方が大きい　京都

「京都より」は一種の基準点を表している。「ト格」「デ格」名詞句が基準を含意する時、名詞修飾節の被修飾名詞句にならないことはすでに見た。「ヨリ格」が基準を表す際にも同じことが言えるのである。

最後に「～より～まで」がペアとして働いている場合も見ておく。

108）（起点、終点）
　　［9時より　5時まで］　働いた。　→　＊9時より　働いた5時
　　＊5時まで　働いた9時

このように二つの名詞句がセットになっている時は、その一つを抜き出して名詞修飾節の被修飾名詞にすることは出来ないのである。

4　終わりに

多くの先行研究で、基底となる独立文に於いて、被修飾名詞（主名詞）が格助詞を伴っており、それが名詞修飾節の被修飾名詞になる場合、「内の関係」を結ぶと説明されている。しかし、本研究ノートで考察したようにすべての格助詞でそれが当てはまるわけではない。格助詞「ヨリ、マデ」を想定できる名詞修飾節は認めにくいのである。

さらに、その他の格助詞に於いても「デ、ト」が「基準」を示す場合には、それらの格助詞が後接する名詞句が名詞修飾節の被修飾名詞句になることは出来なかった。

また、人間の持つ知識であるスキーマにその読みを依存する場合もあった。格関係が想定できず、スキーマにたよった名詞修飾節は「外の関係」にあるとされてきた。しかし「内の関係」の名詞修飾節にもスキーマが関わることがあるのである。

本研究ノートは名詞修飾節の「内の関係」に限定して考察を進めてきた。しかしそこには「外の関係」との橋渡しになるような例も見られた。

「外の関係」の名詞修飾節についても引き続き論考を進めたいと思う。

参考文献

阿辺川武、奥村学（2005）「日本語連体修飾節と被修飾名詞間の関係の解析」、『自然言語処理』Vol.12　No.1　Jan.2005　pp107-123

片桐史恵・田路敏彦（2018）「名詞修飾節の日英対照研究」、『中部学院大学・中部学院大学短期大学部　教育実践研究』第3巻、第2号　pp97-103

神澤克徳（2012）「外の関係を中心とした日本語連体修飾の分析―対照言語学的観点から―」『言語処理学会　第18回年次大会　発表論文集』（2012年3月）pp46-49

Yabuki-Soh, Noriko(2013) “Types of Japanese Noun-Modifying Clauses Used in JFL Textbooks”, *Japanese Language and Literature*, Vol. 47, No. 1 (April 2013), pp 59-92

https://www.jstor.org/stable/24394361?seq=1

（令和4年10月14日受理、令和5年3月31日採択）